

## 短歌（二十七）

下田 明美

裏庭を無断で駆けて降りて行く

国道19号、何か求めて

夏草が畑一面生い茂る

ミニトマトの赤い果物

久々に砂防ダムまで散歩する

タローとジローはもう居ない

制服にチョコレートを隠したのは

男女二人の若い行員

あだ名がパトラをサガしてよ

困っているのよ、恥ずかしいのよ

久々に栖雲すくもの山を眺めれば

遠く霞んで修善寺が見える

ゴロゴロとただゴロゴロとソファアイン

腰痛治らず長い秋の日

森となり枯れて行くみどりの木

人は汗して手入れをするのだ

こんなにも腰痛抱えても

畑待ってる収穫待ってる

時間から逃げてしまいたい夕暮れの

あたしのひととき黄昏のとき

はしになりすべての力入れてゆく

人の手では終わらない木々

腰痛を抱えて田んぼ見つめれば

まく手がつらい農作業かな

